

国語 1

国語

(50分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、
左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 1、問題冊子は、13ページまであります。
- 2、解答用紙は問題冊子の中央にはさんでいます。解答はすべて、解答用紙に書き込みなさい。
- 3、始め、の合図でページ数を確認し、受験番号・氏名を書きなさい。
- 4、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。印刷のはっきりしないところがあれば、静かに手をあげなさい。
- 5、時間を知りたいときも、静かに手をあげなさい。
- 6、具合が悪くなったり、トイレに行きたいときは、手をあげて、監督の先生の指示に従って行動しなさい。
- 7、問題冊子は、各自持ち帰ってよろしい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお字数制限のある問題は句読点や記号も一字にふくみます。)

リスは秋の森で胡桃を集める。冬に備えてそれを食べ、食べきれなかった分は翌日のためにこっそり隠す。たとえば巣穴の奥へ、たとえば地面に穴を掘って。

ところが、リスはそれを忘れてしまう。たくさんのリスたちによって埋められた胡桃が、春になるとあちこちで芽を出す。そのうちの何本かは無事に葉を広げ、すくすくと背を伸ばし、胡桃の木に育つ。

文庫本は胡桃だ。書店は秋の森だ。町を歩いているときに **A** 立ち寄った店で、なにげなく見つけた文庫本を買い、持ち歩く。 **B** 読む。読みきれなかった分は、後で読むつもりで鞆やコートのポケットに、入れる。しまう。

隠す。そして、忘れる。リスの流儀だ。これで次の春に芽を出す準備は整った。 **①** つばき
文庫本というのは、大きくて重くて持ち運ぶことのむずかしかった単行本に翼をつけたかたちだ。小さくて、薄くて、読みやすく、買いやすく、持ち運びやすい。どこへでもツれていって好きな場所で読める。しかし、持ち運ぶためのかたちは、忘れるためのかたちでもある。小さくて、薄くて、買いやすい。つまり、ちようど忘れやすいようにできているのだ。

本棚に差しておいたはずなのに、単行本の山に埋もれて姿が見えなくなる。そのうちに読みかけていたことも忘れてしまう。旅の途中、港のターミナルで買って船の中で読み、下船するときに旅行鞆にしまつてそれきり忘れてしまった一冊もあった。

それらがどうなったか。時が経ち **C** 存在を忘れた頃に出てきて、持ち主を驚かせ、よろこばせた。途中までになつていた物語が、新しい物語のように、また、古くて懐かしい物語のように目の前に立ち上がった。

② 忘れるという選択肢のあることが私たちを自由にする。文庫本には **D** あらかじめどこかで持ち主に忘れられる

ことが織り込まれている。喫茶店のテーブルの上に、旅行鞆の底で、本棚の陰に、ひっそりと忘れられるウンメイ。^b
今年高校に入った息子は、生まれつきの無精者^(Y)だった。

無精者だから、だいたい荷物は最小限で済ませようとする。学生服のポケットには、四次元につながっているのではないかと疑うほど物が詰め込まれている。洗濯に出すときにポケットの中身をテンケンして驚いた。そもそも彼は筆箱を持たない。シャープペンとボールペンの黒と赤が一本になったものを持つ。ポケットの中にだ。それから、消しゴムもある。ポケットの中にだ。定規、マスク、ティッシュ、小銭が二百九十円くらい、メモ、学校からの配布物、自転車の鍵。いうまでもなく、ポケットの中にだ。このへんまでは鉄板だ。コンパスはさすがに危ないと思う。できれば小銭もちやりちゃり鳴るから入れないほうがいいと思う。だって、しつこいようだが学生服のポケットの中なのだ。さて、そして、反対側のポケットに、文庫本が一冊。これでもどこへでも行ける。このポケットがあれば——文庫本が入っていればの話だが——どこへでも行ける。四次元ポケットというより、どこでもドアのほうが近いのかもしれない。

息子の今回のどこでもドアが森鷗外^(*)だったことがイガイだった。中学生だった頃、読みにくいと嘆いていたのを聞いていたからだ。家には夫シヨウウの立派な鷗外全集がある。成人祝いに揃えたものだそう。二年ほど前、息子が中の一冊を手にとってばらばらめくり、重いし、古くさいし、などと困り顔をしていたのだった。それが、今、ポケットに鷗外。彼はいったいいつ、この文庫本を選んだのか。そしていつこの文庫本を開いているのだろう。

「阿部一族、おもしろかった？」

尋ねたら、ほんの少し黙ってから、

「どこにあった？」

真顔で聞いてきた。君の学生服のポケットの中だよ。

「せっかく寝かせてたのに」

うまいことをいう。忘れていたくせに、寝かせておいたとは。
でも、彼はいったのだ。

⑤「一度寝かせてからまた読むと、なんだか深く読める感じがするんだよ」

リスだ、と思った。全集は土だったのか、水か太陽だったのか。いつか埋めた胡桃は忘れた頃に芽を出して、やがて大きな木に育つ。そこになった胡桃を、リスはまたよろこんで夢中で齧るのだろう。

(宮下奈都「秋の森のリス」による)

問題の都合上、本文を改めたところがあります。

(注) ※鉄板だ……ここでは、ほぼ例外がないという意味。

※森鷗外……明治・大正時代の小説家。

※阿部一族……森鷗外の小説作品の一つ。

問一 問題文中の空らん

A

D

に入る最も適切なことばを、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号は二回以上使ってはいけません。

ア すっかり イ たぶん ウ ふと エ まして オ もちろん

問二 傍線部(X)、(Y)の問題文中における意味として最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ろく。

(X)「織り込まれている」

ア 考えに入れられている。

イ すでに組み入れられている。

ウ みんなに予想されている。

エ 織って作られている。

オ 何度も繰り返されている。

(Y)「無精者」

ア 要領がよくむだを出さないひと。

イ 恥ずかしくて努力できないひと。

ウ がまんできずあきらめが早いひと。

エ めんどくさがって怠けがちなひと。

オ 無謀に見えても夢を語るひと。

国語1

国語1

問三 傍線部①「翼をつけたかたち」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、

記号で答えなさい。

ア 次に読むときまで隠しておけるといふこと。

イ 安いがありがたいがないといふこと。

ウ 自由な想像を生み出すといふこと。

エ 何度でも読み返せるといふこと。

オ 手軽だがどこかに行きやすいといふこと。

(5)

(4)

問四 傍線部②「忘れるという選択肢のあることが私たちを自由にする」とありますが、どういうことですか。最も適当

なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 読みかけていた文庫本の存在を一度忘れることによって、見つかって再び読むときに、以前までの内容にと
らわれずに本の世界を深く味わうことができるということ。

イ 文庫本が読者の想像力をかき立てるように作られていることで、本に縛られることのない創造性に富んだ発
想が、私たちの内面から生み出されていくということ。

ウ 読み切れなかった文庫本がそのままどこかに紛れ込んでしまふことで、忘れた頃に発見されて持ち主を驚か
せ、喜ばせるという楽しみがもたらされるということ。

エ 読んでみたが面白くなかった本をあえて読むのをやめて放置しておくことによって、時が経ち自分が成長し
た際に、その本を理解できる喜びを感じられるということ。

オ 本棚や鞆の中にしまっておいた文庫本がいつの間にかなくなることで、再びその本が姿を現すまでに、新し
い物語や古くて懐かしい物語が繰り広げられるということ。

(6)

国語 1

国語 1

問五 傍線部③「しつこいようだが学生服のポケットの中なのだ」という表現には、筆者のどのような意図が表れていま

すか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 学校に必要なものを持ちこむ息子への不満を表そうとする意図。

イ きちんと着用すべき学生服を乱暴に扱っているということを非難する意図。

ウ 入れているはずのないところにいろいろな物を入れていることを強調する意図。

エ おかしな習慣をもつ息子と毎日接している自分の苦勞への同情を求める意図。

オ 狭い空間に多くの物が詰まっているという幻想的な光景を想像させる意図。

問六 傍線部④「これでどこへでも行ける」とありますが、どういうことですか。四十五字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑤「リスだ、と思った」とありますが、どういうことですか。「リス」と「息子」という表現を必ず用いて六

十字以上八十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直して答えなさい。

(7)

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 い に 答 え な さ い 。 (な お 字 数 制 限 の あ る 問 題 は 句 読 点 や 記 号 も 一 字 に ふ く み ま す 。)

それは今年の春先、やはりこの河川敷^{かせんじき}のできごとだった。風の冷たい日だったが、雅之君^{まさゆき}はスケッチブックに向かい、一心に絵筆を走らせていた。枯れた茂み^{しげ}のはずれに、油菜と花大根の群生^{ぐんせい}を見つけたのだ。それはまるで黄色と紫^{むらさき}の夕ペストリーのようだった。

声をかけられたのは、ちょうど細筆で花々^{はなはな}を点描^{てんびよう}している時だった。雅之君は振り返^{かえ}った。すると、汚れた髪^{かみ}にひげ面の男が笑^えみをたたえて立っていた。

「何年生？」

太い声だった。雅之君の腰^{こし}は折り畳み椅子^{たたいす}から浮^うき上がった。「こんど、中三」

と答えるのがやっとだった。

バンさんは雅之君の水彩画^{すいさいが}をじっと覗^{のぞ}きこんだ。そして目の前の花々^{はなはな}を指さした。

「すこし前に南の風が強く吹^ふいたろう。あれが春の挨拶^{あいさつ}だ。透^すき通った刷毛^{はけ}を走らせて、自分の通り道を見せていく」

バンさんは群生^{ぐんせい}に近づき、花々^{はなはな}を手でそっと撫^なでた。雅之君は今でも、その時のバンさんの節くれ立った指^{ゆび}を描^{えが}くことができる。

掘^ほり出されたばかりのサツマ芋^{いも}みたいな指^{ゆび}だった。あんなにも汚^{よご}れた人の手を見たのは初めてだったかもしれない。しかしなぜか雅之君は、その手を面白^{おもしろ}いと思った。油絵^{あぶらえ}で描いたら凄^{すご}そうだとも思った。

バンさんの言葉。雅之君はそこにも惹^ひかれるものがあつた。春の到来^{とらい}を「通り道を見せていく」なんて表現した人に、雅之君はこれまで会ったことがなかった。同級生や両親はともかく、美術部の顧問^{こもん}の先生だって、決してそんな言い方はない。寒いとか、暑いとか、春だねとか、それで終わってしまう。

国語 1

国語 1

わくわくする言葉というものがあんなら、雅之君は初めてそれを受け取ったような気がした。それは言い換^かえるなら、言葉が生きているとか死んでいるとかの坎^かクだったのかもしれない。普段^{ふだん}周囲から投げかけられる言葉は、二つか三つの単語^{単語}が並^{なら}んだものでしかなかった。

「お前^{まへ}んち、親^{おや}なに？」「ノート貸^かして」「金貸^かしてくれよ」「高校行くの？」「テストどうだった？」「勉強^{めいけん}しなさい」「知らねえ」「マジ？」

なくともいい言葉ばかりだ。というより、言葉なんてなくともいいと思^{おも}っていた。クラスメイトなんていてもいなくても自分には関係^{かんけい}がないように、およそすべての言葉もつまらないものでしかないと思^{おも}っていた。

でも、それは自分のせいかもしれない、という考えも雅之君にはあつた。

自分も同じだ。なにかを話そうとしても単語を並べるだけだ。クラスメイトがいなくてもいいのなら、自分だつていなくてもいいのかもしれない。

雅之君はバケツをさげたまま歩^あいた。流れが大きく曲^まがっているところを越^こえると、遠くに橋が見えてきた。大水の被害^{がい}は変わらず、河川敷はどこまでも泥^{どろ}をかぶっていた。草^{くさ}地^ぢがごっそりえぐられた場所もあつた。そこには池^{いけ}ができていて、ピーバーの巢^ねのように灌木^{かんぼく}が盛り上がって浮^うかんでいた。台風ひとつでここまで景色が変わる。これまで慣^なれ親^{おや}しんできた多摩川^{たまがわ}はもうそこにはなかった。

今なら雅之君はわかつた。それはいつもの日没^{にちぼつ}でありながら、ただ一度しかこの世に起きない天地のドラマだった。サライ^{サライ}することのない光^{ひかり}が降^ふり注^{そそ}ぎ、草^{くさ}むらはあらゆる色^{いろ}に輝^{かがや}いていた。目をつぶれば、その鮮^{あざ}やかさは雅之君の内側^{うちがわ}でまだ失^うわれず息^{いき}づいている。しかし目を開^{ひら}ければ、それはもう永遠^{えいゑん}に現^あれないのだと、変わり果^はてた河川敷^{かせんじき}そのものが語りかけてくるのだった。

世界にも、自分にも、大きな穴^{あな}があいたみたいだと雅之君は思^{おも}った。そしてその穴^{あな}になにかをあてがうように、雅之君

はこれまでここで描いてきた絵や、バンさんがくれたいちいちのアドバイスを脳裏によみがえらせていた。

「絵はうまい。でも、うまいってただけだな。見えているものしか描いていないからだ」

バンさんはよくそう言った。「見えないものを描かなきゃ」と。

また泥を踏み、一匹のナマズの子を川まで戻しに行きながら、雅之君はその言葉の意味を具体的に感じ取った日のことを思い出した。川原に咲いていた紫陽花を描くうち、いつの間にか迫りだしていた雲にやられた時のことだ。

日が陰ったと思つたら、空はいきなり鉛色に変わり、水彩絵の具で描いた紫陽花に雨がチョコセツ落ちてきた。どうしよう戸惑っているうち、画用紙の上の花や葉はどんどん滲んでいった。あわてた雅之君はスケッチブックを胸に抱え、上流の橋まで走った。そこにバンさんたちが住んでいることを雅之君は知っていた。

迷いがなかったと言えぼうそになる。でも、それまでに雅之君はもう何度もバンさんたちと言葉を交わしていた。出会った頃のような警戒心はなかった。

ブルーシートの掘っ建て小屋の前で、バンさんは空き缶をつぶしていた。缶に板を乗せ、それを踏んでつぶす作業だった。

バンさんは雅之君にすぐ気づいた。テマネキをして、「おい」と声をかけてきた。そしてまわりのホームレスの人たちに「友達だ」と紹介し、歯を見せて笑った。

「いいところに来たな。今日は面白いものがあるぞ」

バンさんは空き缶から離れると、小屋の奥から透明なポウルを取り出してきた。

「今日は優雅な気分になろうと思つてたんだよ」

ポウルには水が張られ、何匹かの小魚、クチボソやハヤが泳いでいた。他のホームレスの人たちは「またそれか」と笑っていた。

国語 1

国語 1

「見てみな」

バンさんはポウルを持ち上げ、雅之君の頭上に掲げた。光がポウルのなかでゆらゆら揺れ、魚たちはそのきらめきに絡むようにして泳いでいた。雅之君が初めて見る魚の姿がそこにあつた。胸びれや腹びれが小刻みに動き、虹を放っている。

「魚は普通、真横か斜め上からしか描かないだろう。俺たち人間が普段そうやって見ているからだ。でも、川底に目があればこんなふうに見える。角度を変えるのもひとつの工夫なんだよ。絵のギジュツはあるようだから、こういうのを細密画でやってみな。だれも見たことのない水の世界になる」

すごいねえ、バンさん。さすが元イラストレーターだ。

ホームレスの人たちからあがつた声を雅之君は覚えている。雅之君も同じように「すごいねえ」と思った。あの瞬間、雅之君は当たり前前の世界のなかに、見知らぬ世界が内包されていることを知ったのだった。

(ドリアン助川「多摩川物語」による)

問題の都合上、本文を改めたところがあります。

(注) ※タペストリー……絵のようなものを織り出した壁かけ。

※点描……多くの色の点で絵を描く方法。

※灌木……低木の古い呼び方。

※細密画……細部まで細かく描かれた小さな絵。

問一 傍線部 a、e のカタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 傍線部①「透き通った刷毛を走らせて、自分の通り道を見せていく」とありますが、「刷毛」と「自分」は何をたどっていますか。本文中からそれぞれ漢字一字で抜き出して答えなさい。

問三 傍線部②「そこにも惹かれるものがあつた」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 生まれて初めて耳にする皮肉な言葉だつたから。
- イ 心に訴えかけるような新鮮な言葉だつたから。
- ウ 深く考えても理解できない難しい言葉だつたから。
- エ 現象を冷静に分析した客観的な言葉だつたから。
- オ 飾り気のないありふれた言葉だつたから。

(12)

問四 傍線部③「雲にやられた」とありますが、どういうことですか。三十字以内で説明しなさい。

国語 1

国語 1

問五 傍線部④「友達だ」と紹介し、歯を見せて笑つた」とありますが、ここから読み取れるバンさんの人物像として最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 年齢の離れた雅之君を友達として親しく接してくれる、気さくな人物。
- イ 自分の弟子である雅之君を友達だと言って紹介している、控え目な人物。
- ウ 初めて出会つた雅之君を友達として認めてくれる、きまじめな人物。
- エ 中学生の雅之君を友達だと言ってからかっている、ユーモアのある人物。
- オ 絵を習いに来た雅之君を友達として大切にしてくれる、思いやりのある人物。

問六 この文章のある段落の冒頭には次の一文が抜けています。どこに入れるのがふさわしいですか。その直前の段落の終わりの七文字を抜き出して答えなさい。

(13)

雅之君はその荒涼とした風景の向こうに、つい数日前に見たばかりの夕暮れを重ね合わせていた。

問七 二重傍線部「雅之君はその言葉の意味を具体的に感じ取つた日のことを思い出した」とありますが、雅之君はバンさんとの関わりを通して最終的にどのようなことに気づいたのですか。五十文字以内で説明しなさい。

国語 解答用紙

受験番号

氏名

一

問一

A

B

C

D

問二 (X)

(Y)

得点

問三

問四

問五

問六

Grid for question 6

問七

Grid for question 7

問八

a

b

c

d

e

二

問一

a

b

c

d

e

問二

「刷毛」

「自分」

問三

問四

Grid for question 4

問五

問六

問七

Grid for question 7